

巻頭言 私の核医学道

石井 一成

Ishii Kazunari

(神戸大学大学院 医学系研究科 放射線医学分野)



この度、第66回日本核医学会学術総会会長を拝命し、第46回日本核医学技術学会総会学術大会(近畿大学病院 花岡宏平大会長)との合同学術大会を、2026年11月19日(木)~21日(土)まで、姫路市のアクリエひめじにおいて開催する運びとなりました。今回の大会テーマは、花岡大会長と相談を重ね、「輝く核医学道」といたしました。

日本には武士道、茶道、華道等、多くの「道」があります。それらは単なる技術や技能ではなく、長い年月をかけて培われた精神性や人としての姿勢を表しています。核医学の世界にもまた、「道」があると筆者は考えています。放射性同位元素から放たれる「輝き」は、診断や治療へとつながり、患者さんの健康と未来に希望をもたらします。そのような核医学の果たす役割と、その発展に携わるすべての人々への敬意を込めて、「輝く核医学道」というテーマを掲げました。そこで本稿では、筆者自身が歩んできた「核医学道」についてご紹介したいと思います。

筆者が医学の中でも放射線科を選んだきっかけは、幼少期から絵を描くことが好きだったことにあります。医学部に進学した後も、画像を扱う診療科に魅力を感じ、「Baで胃の絵を描こう」という思いで母校・神戸大学放射線医学教室に入局しました。しかし、その時点では、自分が核医学を生涯の専門にするとは全く思っていませんでした。核医学グループを選んだ理由も、最初は「雰囲気良さそうだった」という、ごく素朴なものでした。その後、筆者の進む道を決定づけたのが、兵庫県立高齢者脳機能研究センター(兵庫脳研)の設立でした。卒後わずか7年目の筆者にPET導入という大きな役割が与えられたのです。当時、サイクロトロンを備えたPET施設は全国でもわずか12施設しかなく、兵庫県初のPET施設立ち上げは極めて大きな責任を伴うものでした。その準備のため、当時脳循環・脳代謝PET研究の最先端を走っていた秋田県立脳血管研究センター(秋田脳研)で半年間研修し、PETの基礎から臨床応用まで秋田脳研の先生方から学びました。兵庫脳研ではPETを用いた認知症研究に取り組み、その成果としてレビー小体型認知症に特徴的な後頭葉の血流・代謝低下を明らかにすることができました。この経験は、筆者の研究人生の大きな礎となりました。更に1999~2000年には、当時ドイツ最大の核医学教室であったミュンヘン工科大学医学部核医学教室へ留学する機会を得ました。当時、世界で唯一、SPMと3D-SSPという2つの脳画像解析ソフトウェアを同時に運用していた施設であり、画像解析技術を深く学ぶことができたことは、その後の研究活動に計り知れない財産となりました。帰国後には、兵庫脳研が兵庫県立姫路循環器病センターへ統合され、日本で初めてサイクロトロンが廃棄されるという出来事を経験しました。PETを失い、「PET浪人」とも言える時期を過ごしましたが、その間も蓄積されたPETデータの解析やSPECTを活用した臨床・研究を継続しました。そして近畿大学へ赴任後には、一般核医学診療に加え、腫瘍FDG-PETをはじめとする日常診療を充実させると共に、再びサイクロトロンを利用したアミロイドPETの立ち上げを行いました。更に多施設共同研究としてアミロイドPETやタウPET研究を推進し、多くの貴重なデータを収集することができました。また、島津製作所が開発した頭部・乳房専用PET装置の臨床評価にも携わることができたことは、大変意義深い経験でした。

振り返れば、筆者が歩んできた核医学道は、脳核医学という比較的狭い一本道だったのかもしれない。しかし、核医学には腫瘍、循環器、炎症、セラノスティクス等、数多くの道があり、それぞれが互いにつながりながら発展しています。そして核医学は、医師だけで成り立つものではありません。診療放射線技師、看護師、薬剤師、医学物理士、化学者、工学研究者、企業、そして何より患者さんと共に歩んでこそ発展するものでまさに多職種が1つの目標に向かって歩む「道」であることが、核医学の大きな魅力であり強みだと思います。筆者の歩んできた核医学道は多くの方がたの協力、支援を受けて参りましたことをここに深謝いたします。

最後に本学術大会が、参加される皆さま一人ひとりの「核医学道」を更に輝かせ、新たな出会いと未来への一步につながることを心より願っています。

プロフィールはp.22に掲載